

中之島図書館所蔵の絵画について

鳴澤 成泰（中之島図書館）

1. はじめに

図書館が保有する資料に関する規定としては、図書館法(昭和 25 年法律第 108 号)第 3 条(図書館奉仕)第 1 号に「郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フィルムの収集にも十分留意して、図書、記録、視覚聴覚教育の資料その他必要な資料(以下「図書館資料」という。)を収集し、一般公衆の利用に供すること。」と書かれている。

図書館では挿絵入りの図書や浮世絵、絵巻物など美術品的価値が高いものも多く所蔵しているが、それはあくまでも書物あるいは書物の付属物という形で、絵そのものを見るというよりは、その中に盛り込まれている様々な情報、例えばかつての風俗であるとか、物の形であるとかを文字よりもはるかに雄弁に物語るものとして、図書館として整理し、利用に供している。基本的に芸術作品としての絵画や彫刻は収集対象ではない。それにもかかわらず多くの絵画を所蔵している。

中之島図書館では、重要文化財としての重厚な建物とともに、長崎市の平和祈念像で有名な西村西望作の 2 対の彫像や明治の大画家浅井忠の 3 枚の絵画などすぐれた芸術作品が館内に展示されている。浅井忠の絵画は記念室に掲示されているため、年に一、二度しか見ていただく機会がないが、彫像は正面のホールにどっしりと据えられており、図書館に集う人々を落ち着いた芸術的雰囲気包み込んでいる。

その他にも、多くの絵画を所蔵しており、かつては郷土資料室(現:マイクロフィルム閲覧室)に菅楯彦や生田花朝の絵が掲示されていたり、時には展示会を行うなど様々な形で展示されていたようである。ただ現在では管理上の問題もあり、しまいこんであってあまり見ていただく機会がない。今年芦屋市立美術博物館で開催された「菅楯彦の世界」展に日記や図書の表紙絵などとともに 6 枚の絵が出品されたり、昨年当館で谷崎潤一郎の『盲目物語』の講演をされた際、その口絵に使われた北野恒富の「茶々殿」をお見せしたりといった形で活用している程度である。

絵画の取得記録を調べてみるとすべて寄贈である。画家本人からの寄贈もあるが、寄贈者が画家とどのような関係にあったのか、また図書館とのかかわりはどうであったのか、記録が残されていないため探すことができず、よくわからない点もあるが、何かの経緯で

特に「中之島図書館へ」と寄贈していただいたものであるに違いない。

中之島図書館は 100 年以上の歳月の中で様々な変化を遂げてきた。最近の十数年をとってみても中央図書館の完成とともに機能を大阪・古典籍資料を特色とする一般的な図書館として、図書類を大幅に中央図書館に移し、閲覧室の構成も変え、現在の文芸ホールを設置している。そして 2004（平成 16）年から図書館の目指すところにあわせ一般資料室をビジネス資料室に変え、部屋の模様替えや図書類の重点化を行った。このような大きな変化のなかで、いつしか絵画の存在が希薄になってしまったのではないかと思う。

本稿では中之島図書館が所蔵する絵画（屏風や色紙類については除外した。）について整理し、紹介しようと考えた。作家については良く知られる大家から今日ではあまり知られていない方もおられる。実際資料を調べても現時点では情報が得られない方もある。寄贈者についても申し訳ないことながらお名前以外はほとんど情報が残されていない。作家ご本人以外の方については作家の身寄りや友人知人の方であろうと語り伝えられている。このような限界はあるが、わかる範囲で記録として整理しておきたいと思う。適宜区分して整理したが、それぞれの区分の中では作家の生年順に配列し、最後に情報が不明なものを配置した。絵画のスナップ写真は紙数の関係から数枚に絞って挿入した。なお文中敬称は省略した。

2. 大阪、京都、奈良を描いた浅井 忠の 3 枚の絵画

中之島図書館は 1904(明治 37)年に住友家の寄付により本館が建設され、その後利用者の増加、蔵書数の増加により手狭になったため、住友家の寄付により 1922(大正 11)年に両翼の拡張工事を行っている。その際、現在のホールに彫像が設置されたり、記念室も再整備され今日の姿になった。3 枚の絵もその際、記念室の室内を飾るものとして寄贈されている。

浅井 忠（あさい・ちゅう）は 1856（安政 3）年佐倉藩江戸屋敷に生まれた。幼いときから絵を好み、1864（元治元）年佐倉藩の絵師黒沼槐山について花鳥画を学んだ。1873（明治 6）年に上京し、はじめは英語の塾で学んでいたが、1876（明治 9）年国沢新九郎の画塾彰技堂に入門し、西洋画研究を開始、同年工部美術学校創設とともに入学し、同校画学教師フォンタネージに指導を受けた。1889（明治 22）年明治美術会を創立し、同年第一回展に「春畝」、翌年第二回展に「収穫」など明治洋画を代表する秀作を発表するなど活躍し、1898（明治 31）年には東京美術学校教授に就任している。1900（明治 33）年から 2 年間にわたるフランス留学から帰国後、東京美術学校教授を辞して、1902（明治 35）年新設の京都

高等工芸学校教授として京都に赴任している。翌 1903 (明治 36) 年自宅に聖護院洋画研究所を創設、1905 (明治 38) 年関西美術院が創設されると初代院長に就任するなど、関西画壇の指導者として活躍したが、1907 (明治 40) 年に京都で没している(1)。

寄贈されている作品は 1922 (大正 11) 年 10 月 21 日受け入れたもので

(1)「大阪港(安治川)」89.0×153.5 洋画 キャンバス油彩 1904 (明治 37) 年頃制作



(2)「牛」93.0×63.0 洋画 キャンバス油彩

(3)「奈良」93.0×63.0 洋画 キャンバス油彩

である。「牛」は京都を「奈良」は鹿が描かれており奈良をイメージするものであるという。

住友家の当主住友春翠は著名な美術品の収集家であり、内外の絵画を収集していた。『住友春翠』(4)によると、浅井忠が京都に移ってつくった聖護院洋画研究所が研究生の増えるに従い新教場新築の儀がおこり、京都の個人の画塾を糾合し、資金として一般からの寄付金も募って関西美術院を作ろうとした。その際、ともに作る事となる鹿子木孟郎が住友家に働きかけ、1000 円を贈られている。資金としてはこの 1000 円を含め 1588 円 70 銭集まったという。ともあれこの資金で関西美術院は建ちあがり、浅井忠が初代の院長となっている。

鹿子木孟郎は外遊中に住友家の顧問川上謹一から手紙をもらい、西洋画の買い付けを頼

まれたが、自身の留学の方が住友家にとってプラスであると返事を送り、3年間の留学をすることができるようになった。帰国後さらに1906(明治39)年から2年間住友家の命を受けパリの留学し、住友家のコレクションとなる絵画をもたらしている。須磨別邸にはフランスの名画とともに日本の洋画家の作品も多く収集され、浅井忠のものも数点あったという。このような浅井忠と住友家の関係から収集された作品の一部が寄贈されたのであろう(5)、(6)。

3. 大阪府文芸懇話会に集う芸術家達

中之島図書館はかつて単なる図書館という以上に大阪の文化センターという役割を担っていた。それが大阪府文芸懇話会である。1950(昭和25)年に大阪府立図書館(現在の中之島図書館)に事務所をおいて発足している。大阪文化賞、大阪芸術賞の各受賞者及びその審査関係者をもって組織されており、大阪における文化政策の一環として、文学芸術面の振興と発展を図り、会員相互の親睦と啓発に資することを目的としていた。当初の世話人の中に、当時の図書館長中村祐吉とともに鍋井克之、菅楯彦の名がある。中村祐吉の言によれば「この会が一番華やかだったのは昭和37年。今は亡き菅楯彦画伯他数十名の会員諸氏が大阪府の文化振興のため、はるばる東京から賓客久保田万太郎氏の応援を得て、府下9市・町で文芸講演会をブッテ廻ったときだ」(7)という。このような図書館を舞台とした活動もあって作品を寄せられたのであろう。

3.1 須磨對水(すま・たいすい)

1968(明治元)年大阪市東区北浜一丁目に生まれる。生粋の大阪人で義理の父の久保田桃水に絵を学んだ。京の職画(着物の絵や襖絵など職人としての絵描きのこと)を30年もするなど苦労している。大正から昭和にわたり大阪画壇を代表した画家。1948(昭和23)年大阪府文芸賞(翌年から大阪府芸術賞に名称変更された)を受賞した。1955(昭和30)年没(8)。

次の絵を所蔵している。

「侘び助椿」30.5×44.0 日本画 絹本淡彩

1952(昭和27)年5月12日受け入れ。大館正夫寄贈。

『あしかび第二集』(9)に絵と須磨對水のコラム「大阪や」が掲載されている。

3.2 菅 楯彦(すが・たてひこ)

1878(明治11)年現在の鳥取市に日本画家菅盛南の長男として生まれた。幼時に大阪に移り、1889(明治22)年父の病気のため、高台小学校高等科第二年を中退し、一家を支えるため絵事に専念することになる。以後独学を通じ、大和絵をはじめ円山四条派、狩野派、宋元画、浮世絵など幅広い研究を行う。また本居派の鎌垣春岡に国学や有職故実、山本憲に漢学を学び、仏教美術史、宗教史等の研究も進めた。大和絵的な歴史画や大阪の風物を好んでテーマとした。浪速御民と称して四条流を独自に発展させた瀟洒な筆致で大阪の風物を描き続けた。1949(昭和24)年大阪府文芸賞、1951(昭和26)年大阪市文化賞、1958(昭和33)年日本画家としてはじめて日本芸術院恩賜賞を受賞し、1962(昭和37)年大阪市名誉市民に選ばれた。1963(昭和38)年没⁽¹⁾。

多くの作品を書いている。小説家の表紙絵や口絵なども書いているが、昭和26年の毎日新聞のコラムに次のような記載がある⁽¹⁰⁾。「画伯が戦時中郷里鳥取県に疎開していたとき、当時岡山県勝山に疎開中だった谷崎潤一郎氏が「細雪」の装幀依頼のためはるばる山をこえて訪れ、画伯はすぐさま玄関先である有名な表紙の絵と「細雪」の字を書いたという挿話がある。谷崎氏の画伯に対する敬慕はすでにふかい。「聞書抄」をはじめ多くの挿絵をえがいたことにもよるが単に作品と挿絵画の関係だけでなく谷崎氏を傾倒させる偉大さが菅画伯にはあるのである。」

菅楯彦は文芸懇話会発足時からの世話人であり、昭和27年5月天王寺分館が竣工し、6月に開館式を迎えたとき、招待状の文及び字を書いていたなど、図書館との縁故も深いものがある⁽¹¹⁾。死後多くの蔵書を受け入れている。幕末の大阪の姿を彷彿させる貴重な歴史・風俗資料である浪速百景も菅楯彦の旧蔵品である。

次の6点を所蔵している。

(1)「天王寺舞楽」29.0×61.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装
1951(昭和26)年1月10日受け入れ。梶川真人寄贈。

(2)「町人講学」33.0×55.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装
1951(昭和26)年1月10日受け入れ。梶川真人寄贈。

(3)「浪速文人図」70.0×213.0 日本画 絹本墨に淡彩 額装 昭和14年頃
『菅 楯彦・生田花朝女名作展』⁽¹²⁾に掲載されている。
1951(昭和26)年5月16日受け入れ。吉川重三寄贈。

(4)「木津川の秋雨」37.5×56.5 日本画 紙本淡彩 扇面額装

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

（5）「尻無川の沙魚釣」28.2×55.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

（6）「住吉御田」52.0×58.0 日本画 絹本彩色 額装 昭和10年代

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』（12）に掲載されている。

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

なお梶川真人は菅楯彦の甥であり、後に菅楯彦の養子となって菅真人と称した



菅楯彦 「住吉御田」

3.3 北野恒富（きたの・つねとみ）

1880（明治13）年金沢市に生まれる。小学校を卒業後の1892（明治25）年、版下業西田助太郎に入門し、版下技術習得のかたわら南画を学んだ。1897（明治30）年、彫刻師中

山駒太郎に伴い北国新報彫刻部に勤務したが、画家となる志を持ち、大阪に出て、翌年浮世絵の流れをくむ稲野年恒に師事した。1901（明治34）年大阪新報社に入社し新聞小説挿絵を描いている。1910（明治43）年第4回文展に「すだく虫」が初入選し、翌年第5回文展「日照雨」が三等賞を受賞、出世作となった。また1912（明治45）年「浴後」などを発表し、当時恒富風の美人画をはやらせた。1912（大正元）年の大正美術会、1915（大正4）年大阪美術会、1918（大正7）年茶話会の設立に関与し、1914（大正3）年日本美術院再興後これに参加し、1917（大正6）年同人となった。明治末年から大正にかけては、デカダンので濃厚な美人画を描いたが、その後次第に清澄な画風に転じ、情感豊かな美人画を残した。画塾白耀社を主宰し、大阪画壇の重鎮として活躍した。1947（昭和22）年没⁽¹⁾。

鍋井克之の『大阪繁盛記』⁽¹³⁾によれば、「高津宮の境内に、今春恒富庵の筆塚が建設された。昔、ここに北野恒富が住んでいた由緒の地である。題字は碧梧桐の筆跡になる。」とのことである。

次の2点を所蔵している。2003（平成15）年開催された北野恒富展に出品されている。橋爪節也による作品解説があるので引用しておく⁽¹⁴⁾。

(1)「茶々殿」179.0×84.5 日本画 絹本彩色 額装 大正10年（再興第8回院展）

1955（昭和30）年1月17日受け入れ。森本徳太郎寄贈。

「淀君の連作の一つで、簡潔な構図に桃山らしい衣装を着た茶々を描く。着物の模様にある咲きはじめての山桜のように、花開く直前の娘姿であろう。豊臣の桐の家紋がなく、秀吉の庇護を受ける以前の北ノ庄時代かもしれない。顔は根津清太郎の夫人松子を参考に書いたというが、色彩も抑制されて表情には寂寥感がただよい、運命に翻弄される若き茶々の不幸な境遇を匂わせている。大正10年の院展に出品され、前年の《淀君》に続けて一人の女性の生涯を描き分けようと試みたのだろう。昭和7年、お市や茶々が登場する谷崎潤一郎『盲目物語』の口絵にもこの絵は用いられた。」

(2)「宝恵籠」62.0×74.0 日本画 絹本彩色 額装 昭和6年頃

1956（昭和31）年8月15日受け入れ。内田稲菜寄贈。

「大阪の新年最初の祭が今宮戎神社の十日戎である。」「その本戎に登場するのが芸妓をのせた宝恵籠である。美しく着飾ったハレの日、見物の視線にさらされながら「ほえかごほいほい」と揺られ、やんちゃな芸妓もこのときばかりは神妙な顔つきである。それが面白かったのか恒富はスナップ写真のように宝恵籠を画面一杯に拡大し、その狭い空間に芸妓を詰めこんでしまった。前年の院展の《阿波踊り》につづく郷土色豊かな祭のシリーズ

で、出品作は所在不明だが、同じ構図で宝恵籠を描いた作品が何点も残されている。」

3.4 山口艸平（やまぐち・そうへい）

1882（明治 15）年大阪難波新地生まれ。国学院専門部卒業、独学で日本画を習得した。挿絵画家として活躍した。1955（昭和 30）年大阪府芸術賞を受賞。1961（昭和 36）年没（15）。

収蔵作品としては次の 1 点がある。

「筍市」42.0×45.0 日本画 紙本淡彩 額装

1958（昭和 33）年 1 月 25 日受け入れ。藤枝春月寄贈。

3.5 鍋井克之（なべい・かつゆき）

1888(明治 21)年大阪市生まれ。大阪府立天王寺中学校(現天王寺高等学校)在籍中から日本画を学び始めるが、のちに洋画に転じ、中学校卒業後、東京美術学校(現・東京芸術大学)西洋画科に進み、在学中に第 1 回二科展に出品し、翌年の第 2 回二科展では出品した卒業制作の「秋の連山」が二科賞を受けるなど早くから才能を開花させた。以後の二科展に出品を続け、第 5 回二科展で再度二科賞を受賞するほか、1922(大正 3)年には小出権重、黒田重太郎、国枝金三とともに信濃橋洋画研究所(後に中之島洋画研究所)を設立して後進の指導に当るなど、精力的に活動した。

戦後は第二紀会(現社団法人二紀会)の創立に参加し、1950 年(昭和 25 年)には前年の第 3 回二紀展出品作「朝の勝浦港」などにより日本芸術院賞を受けた。また同年には大阪府芸術賞を受賞している。1958（昭和 33）年大阪市民文化賞受賞。1959 年(昭和 34 年)からは浪速短期大学、1964 年(昭和 39 年)よりは浪速芸術大学(現・大阪芸術大学)教授として指導にあたるなど常に洋画界で大きな存在感を示した。制作の中心であった風景画は、油彩画による日本の風景の表現を代表する作品として高く評価されている。1969 年(昭和 44 年)没(16)。身近に見られるものとして JR 天王寺駅にある 1962（昭和 37）年に完成した壁画「熊野詣絵巻」がある。その他、小説や絵画に関する書物の他、随筆を多く書いており、随筆集として「和服の人」、「富貴の人」、「閑中忙人」、「大阪繁盛記」、「大阪ざらい物語」などがある。

所蔵作品としては次の 2 点がある。

(1)「湖上晴曇」59.5×72.0 洋画 キャンバス油彩 1948(昭和 23)年 第二回二紀展に

出品。

1952（昭和27）年5月12日受け入れ。土井日出男寄贈。

『生誕百年記念「鍋井克之」と旧制天王寺中学の画家たち』(17)の図版20に掲載(モノクロ)されている。

(2)「中之島図書館デッサン」19.0×24.7 洋画 紙本鉛筆

1956（昭和31）年9月28日受け入れ。本人寄贈。

3.6 生田花朝女（いくた・かちょうじょ）

生田花朝とも号する。本名はミノリ。1889（明治22）年大阪市天王寺区上之宮町に生田南水を父に生まれる。1896（明治29）年大阪師範学校附属小学校に入学。このころより家学であった俳句を父に、また藤沢黄波に漢学、近藤尺天に国学を学ぶ。1905（明治38）年四条派の画家喜多暉月に師事し絵を学び始め、1913（大正2）年菅楯彦に入門、大和絵のほか万葉集や国学、有職故実を学ぶ。また美人画家北野恒富にも学んだ。1925（大正14）年第6回帝展に「春日」が初入選、翌年第7回帝展で「浪速天神祭」が女性で初の特選を受賞する。1927（昭和2）年帝展無鑑査、新文展にも出品し、戦後は日展に出品、大阪の風物を大和絵風に綴り続けた。1952（昭和27）年大阪市民文化賞、1958（昭和33）年大阪府芸術賞を受賞。1978（昭和53）年没(1)。

次の4点を所蔵している。

(1)「天神祭」51.5×70.7 日本画 絹本彩色 額装 昭和10年頃

1952（昭和27）年6月19日受け入れ。梶川真人寄贈。

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』(12)に掲載されている。

(2)「鑑真和上来朝図」166.0×113.0 日本画 紙本彩色 額装

1960（昭和35）年5月17日受け入れ。本人寄贈。

(3)「だいがく」190.0×101.5 日本画 絹本彩色 額装

1963（昭和38）年9月14日受け入れ。本人寄贈。

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』(12)に掲載されている。

(4)「住吉大社御田植」96.0×129.5 日本画 紙本彩色 額装

1965（昭和40）年5月20日受け入れ。本人寄贈。

3.7 矢野橋村（やの・きょうそん）

1890（明治 23）年愛媛県越智郡波止浜町（現在の今治市）に生まれる。砲兵工廠で勤務中に左手切断という事故に遭遇するが、1906（明治 39）年南画家永松春洋に入門し、以来右手一本で創作活動に精進した。1913（大正 2）年第 7 回文展に「湖山清暁」が初入選し褒状を受賞、翌年、翌々年と 3 年連続して褒状を受賞した。1921（大正 10）年日本南画院創設に参加し、同人となった。また 1924（大正 13）年私立大阪美術学校を創設する。1928（昭和 3）年第 9 回帝展で「暮色蒼々」が特選を受賞、1930（昭和 5）年以後たびたび審査員をつとめた。戦後 1958（昭和 33）年日展評議員に就任、1961（昭和 36）年には前年の第 3 回新日展出品作「錦楓」により日本芸術院賞を受賞した。また 1950（昭和 25）年大阪府芸術賞、1959（昭和 34）年大阪市民文化賞を受賞した。1960（昭和 35）年日本南画院創立に参加し副会長、1964（昭和 39）年には会長に就任している。南画の伝統を守り、水墨山水を得意とした。「宮本武蔵」、「大菩薩峠」などの新聞連載の挿絵を手がけるなど幅広い活動をした。1965（昭和 40）年没⁽¹⁾、⁽¹⁸⁾。

次の絵が収蔵されている。

「豊秋」縦 52.0cm×横 57.5cm 日本画 紙本彩色 額装 昭和 30 年

1955（昭和 30）年 5 月 12 日受け入れ。藤枝春月寄贈。

1955（昭和 30）年関西総合美術展で発表された作品。矢野橋村 65 歳の作品。画像としては『企画展「矢野橋村展 - 近代水墨画の精粹 - 」図録』⁽¹⁸⁾の 54 頁に掲載されている。

3.8 中村貞以（なかむら・ていいい）

1900（明治 33）年大阪船場に生まれた。幼い頃の両手のやけどで指の自由を欠くという障害をもっていた。9 歳の頃、浮世絵師二世長谷川貞信のもとで写し物を学び、のち 1919（大正 8）年、19 歳のとき、当時大阪画壇の重鎮であり、日本美術院同人の美人画家として盛名をはせていた北野恒富に師事した。1923（大正 12）年日本美術院展に初入選し、春の試作展では受賞している。以後、院展を中心に活躍、爽やかで気品のある作品を発表し、文部大臣賞、日本芸術院賞を受賞、戦後の美人画の最もすぐれた画家の一人として高い評価を得た。1951（昭和 26）年大阪府芸術賞、1960（昭和 35）年大阪市民文化賞を受賞。また横山大観を心と芸術の拠り所として深く尊敬し、横山大観記念館理事長、日本美術院理事を歴任、後進の育成につとめた。1982（昭和 57）年没⁽¹⁹⁾、⁽²⁰⁾。

次の絵を所蔵している

「歌かるた」143.5×59.5 日本画 絹本彩色 額装 1941（昭和 16）年

1952（昭和27）年9月15日受け入れ。本人寄贈。

『モダニズムに香る、高雅な女性美。没後十周年 中村貞井展』(19)に作品の紹介がされている。解説では、「大きな縞の対の銘仙を着た少女は、かるた取りに余念がない。かつての日本のお正月の風景である。モデルは愛嬢青子さんという。小林古径の昭和2年（1927）の作《琴》も愛嬢つうさんの少女時代の姿を写した佳作であるが、この作品も《琴》と同様、古典的な静けさを持つ作品である。」と述べられている。

3.9 平野長彦（ひらの・ながひこ）

1903（明治36）年鹿児島県に生まれる。大阪に出、矢野橋村に師事。1928（昭和5）年第11回帝展に《薄夜》で初入選、以後帝展に入選を重ね、1936（昭和11）年秋の文展鑑査展に《高原》、新文展にも1942（昭和17）年《子夜呉歌》、1943（昭和18）年《肅條》で入選する。戦後は1946（昭和21）年春の第1回日展に《静寂》、秋の第2回日展に《高原》で入選、また日本画院展に出品、大阪美術協会理事をつとめる。1947（昭和22）年大阪府文芸賞受賞、1975（昭和50）年没(3)。

所蔵しているのは次の1点である。

「川口」53.0×73.0 日本画 絹本彩色 額装

1954（昭和29）年9月13日受け入れ。本人寄贈。

4. 大阪ゆかりの画家

図書館と特に関係の深かった3のジャンルに属する人の他に大阪にゆかりの深い人をこの項では取り上げる。

4.1 久保田耕民（くぼた・こうみん）

1890（明治23）年岡山県日生町生まれ。郵便局に勤めるかたわら大阪美術学校に学び、松永春洋に師事して、南画を学ぶ。号を香雲、香芸と称した。「秋糖」が帝展に入選。号を耕民と改めた。大阪画家協会を設立するとともに、日本南画協会理事、大阪有秋会会長として後輩の指導に当たり、日本画の普及に努めた。1969（昭和44）年没(21)。

所蔵作品として次の2点がある。

(1)「山路」96.0×92.0 日本画 紙本彩色 額装

1955（昭和30）年5月12日受け入れ。本人寄贈。

(2)「ヨセミテ溪谷」183.5×98.0 日本画 紙本水墨 額装

1965(昭和40)年3月22日受け入れ。本人寄贈。

4.2 池田遥邨(いけだ・ようそん)

1895(明治28)年岡山県浅口郡玉島町乙島(現倉敷市)に生まれた。1910(明治43)年福山尋常高等小学校を卒業し、翌年単身大阪に出て松原三五郎の天彩画塾に入塾し、洋画を学び、1914(大正3)年第8回文展に水彩画「みなとの曇り日」が初入選した。その一方日本画に興味を持つようになり、1919(大正8)年、京都に出て竹内栖鳳の画塾竹杖会に入門。1921(大正10)年26歳で京都市立絵画専門学校に入学、ムンク、ゴヤらの影響を受けながら新しい日本画を模索し、卒業後研究科へ進み、1926(大正15)年卒業した。1928(昭和3)年第9回帝展で「雪の大阪」が特選となり、1930(昭和5)年第11回帝展で「烏城」が再び特選を受賞。その後独特の鳥瞰図法による明るい色彩の画風へと移行する。戦後、1951(昭和26)年第7回日展「戦後の大阪」など一時抽象風の作品を制作。ついで1955(昭和30)年第11回日展「銀砂灘」、1957(昭和32)年第13回「石」など単純化した画面構成の象徴的作品を発表したのち、1960(昭和35)年、前年の第二回新日展出品作「波」により日本芸術院賞を受賞した。その後童謡的な風景や縹渺とした絵画世界を展開する。1952(昭和27)年日展評議員、1974(昭和49)年参与、1977(昭和52)年顧問に就任。1976(昭和51)年日本芸術院会員、1984(昭和59)年文化功労者となり、1987(昭和62)年文化勲章受章。1988(昭和63)年没(1)。

所蔵している作品は次の1点である。

「砂丘」92.0×69.0 日本画 紙本彩色 額装

1958(昭和33)年3月27日受け入れ。沢田富夫寄贈。

4.3 梶川真人(かじかわ・まひと)

1860(明治29)年鳥取県倉吉市に生まれる。菅楯彦の甥で菅家を継ぎ、菅真人(すがまひと)となった。やまと絵や歴史画を本領とし、楯彦風の風景画や有職故実の主題ですぐれた絵画を制作した。1983(昭和58)年没(22)。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「いかだし」44.5×50.0 日本画 紙本淡彩 額装

1963(昭和38)年9月14日受け入れ。本人寄贈。

(2)「いおり」45.0×49.5 日本画 紙本淡彩 額装
1963(昭和38)年10月29日受け入れ。本人寄贈。

4.4 山川 清(やまかわ・きよし)

1903(明治36)年大阪市生まれ。甲陽中学校卒。川端画学校に学ぶ。1923(大正12)年の大震災後は京都、1925(大正14)年より奈良に転居。1928(昭和3)年から6年間渡欧。帰国後春陽会展に出品。1948(昭和23)年春陽会会員。1969(昭和44)年没(2)。
1951(昭和26)年の毎日新聞には挿絵として山川清の絵が描かれているものがあつた。裸婦とゆりの花が線画で描かれているものである。またカットも採用されている(23)、(24)。
所蔵しているのは次の2点である。

- (1)「古い机」73.0×91.0 洋画 キャンバス油彩
1956(昭和31)年5月30日受け入れ。藤枝春月寄贈。
- (2)「屋根」130.0×161.5 洋画 キャンバス油彩
1957(昭和32)年4月30日受け入れ。本人寄贈。

4.5 小出三郎(こいでさぶろう)

1908(明治41)年大阪東区に生まれる。小出卓二の弟。1925(大正14)年大阪府立天王寺中学校卒業(28回生)。大阪美術学校に入学後、退学して信濃橋洋画研究所に学ぶ。1937(昭和12)年独立美術協会展に初入選。以後毎年出品。1940(昭和15)年独立美術賞を受ける。1947(昭和22)年独立美術協会会員となる。全関西美術協会会員。1967(昭和42)年没(17)。
所蔵している作品は次の1点である。

「八瀬の夕暮」92.0×117.0 洋画 キャンバス油彩
1952(昭和27)年10月22日受け入れ。本人寄贈。

4.6 田川勤次(たがわ・きんじ)

1909(明治42)年大阪に生まれる。赤松麟作塾の田川寛一の指導を受ける。1926(大正15)年第4回春陽会展に入選。1936(昭和11)年第14回春陽展にて春陽会賞受賞。1942(昭和17)年と翌年、文部省主催「新文展」に入選。1947(昭和22)年春陽会会員となる。1948(昭和23)年汎美術協会を関西中心に創立して活動。1981(昭和56)年文化功労者として大阪府より表彰される。また文化功労者として大阪市より市民表彰を受賞

した。2004（平成16）年没⁽²⁵⁾、⁽²⁶⁾。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「花と果実」33.3×23.0 洋画 キャンバス油彩

1951（昭和26）年12月11日受け入れ。小谷茂寄贈。

(2)「静物(ポンカン)」20.5×27.0 洋画 キャンバス油彩

1952（昭和27）年6月9日受け入れ。小谷茂子寄贈。

なお1951(昭和26)年の毎日新聞の学芸欄にポンカンのカットがある⁽²⁷⁾。

4.7 光岡 亮(みつおか・りょう)

1918(大正7)年 中国大連生まれ。京都市立絵画専門学校を卒業し、研究科を1936(昭和11)年修了後、1940(昭和15)年奉祝展に初入選。1946(昭和21)年日美展入選以来10回入選。1957(昭和32)年「春塔社」池田遥邨に師事。1968(昭和43)年から日春展連続3回入選、1969(昭和44)年から改組日展に連続3回入選。1971(昭和46)年関西展審査員、京展で活躍した。大阪在住⁽²⁸⁾。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「少女」66.0×41.0 日本画 紙本淡彩 額装

1954(昭和29)年10月7日受け入れ。本人寄贈。

(2)「暮れ行く」53.5×65.5 日本画 紙本淡彩 額装

1957(昭和32)年11月30日受け入れ。本人寄贈。

4.8 三橋義澄

作家に関する情報はない。作品はかつて児童室にかけられていた。

「母と子 勉強」70.0×79.5 洋画 キャンバス油彩

1956(昭和31)年7月3日受け入れ。本人寄贈

5. 図書館の風景を描いた画家

重要文化財の中之島図書館は中之島周辺の環境と調和し、絵画の対象としても描かれている。当館に寄贈されたものにも図書館やその周辺を描いたものがある。

5.1 鈴木武志(すずき・たけし)

1895（明治 28）年福島県生まれ。太平洋画会研究所、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。中村不折に師事。太平洋美術会参与。1978（昭和 53）年没(2)。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「中之島風景」45.5×53.0 洋画 キャンバス油彩

1954（昭和 29）年 1 月 17 日受け入れ。本人寄贈。

5.2 大泉米吉（おおいずみ・よねきち）

個展について報道する毎日新聞の記事(29)によると、1979（昭和 54）年 7 月の記事の時点で 69 歳なので、1910（明治 43）年生まれということになる。宮城県に生まれ、埼玉県浦和市育ち。1931（昭和 6 年）年東京美術学校を卒業後和歌山県、新潟県、東京都、鹿児島県の旧制中学で 1948（昭和 23）年まで美術の教師として勤務し、東京に帰る途中に大阪で途中下車し、大阪が気に入って住み着いたという。府庁に勤務し、府のポスターや出版物にカットや挿絵を描いていた。10 数年前に府庁を退職し、画家として独立したということである。

風景画家で 1979（昭和 54）年に大阪百景展を開いた。毎日新聞がこれを機に十景を選び紙面化した。1980（昭和 55）年、毎日新聞社大阪社会部が「大泉米吉作品集 大阪十二景」（絵葉書）(30)を発行している。その中には所蔵作品とは違う作品であるが、中之島図書館が描かれている。

所蔵している作品は次の 1 点である。

「府立図書館」31.0×39.0 洋画 キャンバス油彩

1972（昭和 47）年 4 月 24 日受け入れ。本人寄贈。

5.3 深谷 徹（ふかや・てつ）

1913（大正 2）年群馬県前橋市生まれ。本名は徹（とおる）。群馬師範学校卒。1953（昭和 28）年から 2 年間渡仏し、アカデミー・グラン・シュミエール、スペインのマドリッド美術学校に学ぶ。帰国後、創元会展に出品、同会常任委員。1952（昭和 27）年日展で《鳥かごのある静物》が特選。1965（昭和 40）年《集落》が菊華賞。日展評議員。国際具象派美術展にも出品。1992（平成 4）年没(2)。

所蔵しているのは次の 2 作品である。このほか商工資料館落成の際に描かれたペン画と思われるものが現物は所在不明であるが、写真として残されている。

(1)「中之島図書館」24.4×34.7 洋画 紙本水彩

受け入れ時期不明。本人寄贈。

(2)「マドリッドの街角」90.8×116.8 洋画 キャンバス油彩

1960(昭和35)年5月21日受け入れ。本人寄贈。

5.4 萩森久朗(はぎもり・ひさお)

1913(大正2)年三重県生まれ。大阪美術学校卒。カンサス美大卒業。斎藤与里に師事する。元律動美創立会員。二紀賞2回受賞。他に4回受賞(31)。

所蔵しているのは次の1点である。

「図書館付近」37.5×45.0 洋画 キャンバス油彩

1954(昭和29)年3月2日受け入れ。本人寄贈。

6. 肖像画を描いた画家

肖像画は注文によりかかれる場合が多い。その他、画家と描かれる対象の人物の間に何らかの関係があることが多い。

6.1 伊藤快彦(いとう・よしひこ)

1867(慶応3)年京都洛東若王子の神官の家に生まれた。1884(明治14)年田村宗立に師事。1888(明治21)年京都府画学校を卒業する。同年上京し小山正太郎につくが原田直次郎の画塾鐘美館に転じる。初期明治美術会展に出品。1892(明治25)年京都に帰り、家塾鐘美会を起す。1897(明治30)年京都美術協会に入り、以後京都の新古美術展に出品し、同年「農家蓄馬図」で三等賞を得たのをはじめ、しばしば受賞、審査員も勤める。1901(明治34)年関西美術会の結成に発起人として参加、同会の主要作家として出品を続ける。1905(明治38)年関西美術院創設発起人となり、翌年開院後教授となる。浅井忠没後、中沢岩太、鹿子木孟郎について関西美術院長に就任。1936(昭和11)年までその職にあった。早くから風俗画を中心とした人物表現を得意とし、代表作に「少女」、「鷹匠図」等がある。関西洋画壇振興に尽力した功績は大きい。1942(昭和17)年没(1)。

次の1点を所蔵している。

「今井館長」65.0×55.0 洋画 キャンバス油彩 1928(昭和3)年

1928(昭和3)年5月20日受け入れ

館長就任 25 周年を記念して製作された。『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』(32)によると創立 25 周年記念式典と同じ日に大阪ビルディング 8 階ホールで今井館長在職 25 周年記念会が開催されている。この会は経費の関係で創立 25 周年の記念祝賀会が見合わせられると聞いた有志が発起人をつのり、681 人の賛同者を得、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社からそれぞれ 300 円の寄付を得て開催に至っている。伊藤快彦の手による油絵肖像画を本人及び当館用に二部製作することが決まり、祝賀会当日贈呈されている。

6.2 矢野彩仙(やの・さいせん)

1899(明治 32)年に鹿児島城下に生まれ、本名は盛経という。矢野氏の祖先は藤原姓で、のち薩摩の島津家に仕えて 3 万石といわれる矢野出羽守の直系の後裔。母方の関家は備中国新見城主の分家で、その子孫には島津斉彬の信望厚かった学者関勇助があり、西郷隆盛や大久保利通などがその門人であった。若くして徳富蘇峰について国史と国文学を修め、歴史学者として知られ、著者には「日羅上人伝」や「芦北郡史」などがあり、また九州における古い石橋の研究者としてその数千枚の原稿も残っている。油絵については、鹿児島の洋画家大牟礼南涛氏について学び、特に肖像画が得意であった。1969(昭和 44)年没(33)。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「日羅公」197.0×134.0 洋画 キャンバス油彩

1958(昭和 33)年 5 月 11 日受け入れ。日羅公薫績顕彰会会長 吉房一雄寄贈。

『大阪府史』(34)によると、日本書紀に記載があると記述されており、その内容は次のとおりである。日羅は 583(敏達 12)年、朝廷の招きにより百済から来日した。肥後の葦北の国造の子であるが、百済の朝廷に仕えて高官(百済の官位 16 階の第 2 位の達率)となった人物であり、新羅に滅ぼされた任那復興の方策をたてるためであったとされる。百済の政略について述べたことから百済人の徳爾らにより暗殺された。

日羅公之碑が大阪市北区天満橋 2 丁目に建てられている。

6.3 竹中 郁(たけなか・いく)

1904(明治 37)年神戸市に生まれる。兵庫県立第二神戸中学(現兵庫高校)在学中に北原白秋主催の「言葉と音楽」誌に初めて詩が掲載され、関西学院在学中に詩集「黄蜂と花粉」を刊行した。1928(昭和 3 年)から 2 年間ヨーロッパ各地を歩き、「詩と詩論」、「四季」な

どに作品を発表。戦後は児童詩誌「きりん」に力を注いだ。1982（昭和 57）年没⁽³⁵⁾。神戸二中では洋画家小磯良平と同級になり、画家を志すも父の反対にあい、詩作に転じている。鍋井克之とも交流があり、1951（昭和 26）年に彼が座長をした風流座に竹中郁が参加している⁽³⁶⁾。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「ブランデン氏の肖像」35.3×24.5 紙本パステル

1980（昭和 55）年 12 月 3 日受け入れ。本人寄贈。

ブランデン氏は、エドモンド・C・ブランデン（Edmund C. Blunden）で中村祐吉館長が東京帝国大学在学中の 1924（大正 13）年に教授として来日し教鞭をとった。1927（昭和 2）年に帰英、戦後の 1948（昭和 23）年、イギリス文化使節として来日。当時イギリスの一流の詩人で、批評家としてもタイムズ文芸欄の論説委員であった。日本各地で二年間に 600 回という講演を行っている。大阪では 1948（昭和 23）年 4 月 26 日大手前会館で「英文学の成長について」と題する講演を行っている。翌 27 日四天王寺本坊にて文人墨客 30 人あまりと交流。その中に竹中郁の名前もみえる。1959（昭和 34）年にも日本英文学会と英国文化振興会に招かれ、来日し、6 月 15 日大阪府文芸懇話会の主催で懇親会が新大阪ホテルで行われている。6 月 16 日付けの朝日新聞にも「大阪で語るブランデン氏」という記事があり、そのなかで、「かつての教え子大阪府立図書館長の中村祐吉氏や詩人の小野十三郎氏、竹中郁氏らとなごやかに握手をかわし、早くもなごやかな空気がみなぎりはじめた」との記述がみられる。ブランデン氏については中村祐吉著の『うらなり日記』上巻 27～29 章⁽³⁷⁾にくわしい。なお「図書館長の欧米旅日記」⁽³⁸⁾にはブランデン氏の写真も掲載されている。

6.4 千葉 緑

絵画の裏にフランス サロン・ドートンヌ会と書かれている。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「人物像（中村館長）」60.5×50.2 洋画 キャンバス油彩 1959（昭和 34）年

1959（昭和 34）年 5 月 11 日受け入れ。本人寄贈。

7. その他

大阪とのかかわりや作家本人に関することが現時点ではよくわからない作家に関するも

のをこの項に記載した。

7.1 奥田正治朗（おくだ・しょうじろう）

1901（明治 34）年三重県宇治山田市河崎町（現伊勢市）に生まれる。京都市立絵画専門学校に学び、1930（昭和 5）年同校研究科を修了。都路華香、西村五雲らに師事し、1938（昭和 13）年師が没した後、門下生の山口華楊が引き継いだ晨鳥（しんちょう）社に所属する。1926（大正 15）年の第 7 回帝展に「花園養蜂」が初入選して以後、帝展、日展に 24 回入選。「蒼苑」（昭和 30 年第 11 回日展）、「青柿」（昭和 33 年第 1 回新日展）などの代表作を出品し、日展会友となる。雅号正治良。1981（昭和 56）年没⁽³⁾。

所蔵しているのは次の 4 点である。

(1) 「青柿」72.7×91.0 日本画 紙本彩色 額装 1958（昭和 33）年

第 1 回日展出品。同図録 113 頁に絵が掲載されている。

1959（昭和 34）年 7 月 28 日受け入れ。本人寄贈。

(2) 「花の図（蘭）1 本」 46.5×40.5 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

(3) 「花の図（蘭）2 本」 38.0×44.0 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

(4) 「花の図（紫陽花）」 40.5×46.5 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

7.2 高橋惟一（たかはし・ゆういち）

1904（明治 37）年宮城県仙台市生まれ。流派はサロン・ドートンヌ、選抜秀作美術展。ヨーロッパ滞在 20 年に及び、成果をまとめて三越で作品展を開催した。個展により多くの作品を発表。1989（昭和 64）年没⁽³⁹⁾、⁽⁴⁰⁾。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「山間風景」38.0×45.5 洋画 キャンバス油彩

1956（昭和 31）年 8 月 22 日受け入れ。本人寄贈。

7.3 永井雨村

（不明）

所蔵しているのは次の1点である。

「山」88.0×94.0 日本画 紙本彩色 額装

1953(昭和28)年5月14日受け入れ。永井与吉寄贈。

参考文献

- (1) 『近代日本美術事典』講談社 1989年
- (2) 『20世紀物故洋画家事典』岩瀬/行雄・油井/一人編 美術年鑑社 1997年
- (3) 『20世紀物故日本画家事典』油井/一人編 美術年鑑社 1998年
- (4) 『住友春翠』 「住友春翠」編纂委員会編纂 1955年
- (5) 『浅井忠と関西美術院展』 府中市美術館、京都市美術館、京都新聞社 2006年
- (6) 『京都近代美術の継承 浅井忠からいざよいの人々へ』前川公秀著 京都新聞社 1996年 282頁～283頁
- (7) 『なにわづ 28号』 1966年8月34頁
- (8) 池田市歴史民俗資料館ホームページ
(<http://www.city.ikeda.osaka.jp/sisetu/rekisi/kaiga/ptaisui.htm>) 2007年10月24日
- (9) 『あしかび第二集』 大阪府文芸懇話会 1952年 32頁
- (10) 毎日新聞大阪版夕刊 昭和26年6月9日1面 「老兵は死なず 風俗画家 菅橋彦」(写真あり 一休の絵を前にして菅画伯)
- (11) 中村祐吉館長「お別れに当って」 『なにわづ 26号』 1966年4月 1、4頁
- (12) 『菅 橋彦・生田花朝女名作展』 倉吉博物館 1979年
- (13) 『大阪繁盛記』新装・新訂版 鍋井克之著 東京布井出版 1994年 56頁挿絵解説
- (14) 『北野恒富展』 橋爪節也監修 東京ステーションギャラリー等 2003年
- (15) 『全国名前辞典』(http://fine-vn.com/cat_51/ent_9.html) 2007年10月31日
- (16) 『鍋井克之展』 田辺市立博物館 学芸員 三谷 渉編集、田辺市立博物館 2001年
- (17) 『生誕百年記念「鍋井克之」と旧制天王寺中学の画家たち』 産経新聞社 1989年の
図版20、巻末の旧制天王寺中学の画家たち 略歴
- (18) 『企画展「矢野橋村展 近代水墨画の精粹」図録』 枚方市教育委員会 2002年
- (19) 『モダニズムに香る、高雅な女性美。没後十周年 中村貞以展』 朝日新聞社 1991年
- (20) 『中村貞以 現代日本美人画全集 愛蔵普及版6』 関 千代執筆 集英社 1979年

(21) 備前市のホームページ

(<http://www.city.bizen.okayama.jp/kankou/guide/hinase/spot/hondo/kakonoura3.jsp>)

2007年10月24日

(22) 『大坂の書と絵と本 関西大学図書館所蔵』 関西大学図書館 1997年 61頁

(23) 毎日新聞大阪版 1951(昭和26)年5月22日夕刊4頁 「コント 花粉の役目」の挿絵
裸婦とゆりの花が描かれている。線画。

(24) 毎日新聞朝刊7版 1951(昭和26)年7月6日2頁 学藝「自立教育への道 下程勇吉」
のカット 帽子をかぶった男性が描かれている。

(25) 梅田画廊のホームページ (<http://www.umeda-garou.jp/artists/tagawakinnji.htm>)

2007年10月25日

(26) 毎日新聞大阪版 2004年8月29日号

(27) 毎日新聞大阪版昭和26年5月12日号7版2頁

(28) Yahooオークション - M10光岡亮作 画題 金魚

(<http://page8.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/h51517690>) 2008年1月4日

(29) 毎日新聞大阪版夕刊10面 1979年7月7日号

(30) 『大泉米吉作品集 大阪十二景』 アトリエ泉会 1980年

(31) 『芸術家年鑑1992』 日本美術出版 1992年

(32) 『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』 大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行
委員会 2004年 127頁~128頁

(33) 鹿児島県立図書館の貴重書の紹介ホームページ

(<http://www.pref.kagoshima.jp/kentosh/shiryo/kityouitiran16-7.html>)

2007年10月25日

(34) 『大阪府史』第2巻 大阪府 1990年 237-242頁

(35) 毎日新聞大阪版夕刊 2003年3月7日号

(36) 『鍋井克之』 1966年 美術出版社発行

(37) 『うらなり日記』上巻 中村祐吉著 1982年 245-247頁、260-261頁

(38) 『図書館長の欧米旅日記(1950年代の国際交流)』 中村祐吉著 (社)日本図書館協
会内 『図書館長の欧米旅日記』刊行会 1985年 62頁

(39) 愛知県美術館コレクション検索ホームページ

(<http://search-art.aac.pref.aichi.jp/p/seisaku.php?AI=ART19970010>) (2007.12.26)

(40) 『日本美術家事典 1990年版』 オーアンドエムリミテッド 1989年